

学生アンケートから見える幼稚園教育実習1の学びと課題

A study of the prior guidance in the teaching practice in kindergarten
- Through the analysis of the questionnaire after the teaching practice -

増 井 啓 子
Keiko MASUI

キーワード：幼稚園教育実習，アンケート，事前指導，指導案，子ども主体

Key Words：Teaching practice in kindergarten, Questionnaire, Prior guidance, Posterior Teaching plans, Independence of children

1. はじめに

本校では1回生の10月から2週間「保育実習」が始まり、2月に「保育実習Ⅱ」、2回生の6月に「幼稚園教育実習Ⅰ」、8月に「保育実習Ⅲ」、10月に『幼稚園教育実習Ⅱ』と、各2週間合わせて5回の実習を行う。

筆者は、本年度から「幼稚園教育実習指導Ⅰ」「幼稚園教育実習指導Ⅱ」の教科担当をしている。幼稚園教育実習指導全般の指導を行う立場として、学生への事前指導、事後指導のあり方を模索している。今回、新型コロナウイルスの感染症の影響によって授業の在り方が大きく変わった。また、6月の「幼稚園教育実習指導Ⅰ」の配属先は、コロナ禍の状況もあり、各市町村によって受け入れが異なったため、一部の学生は実習直前に配属先を変更することとなり、学生は自己開拓した希望園で実習を行えない状況となった。初めての「幼稚園教育実習」に対する不安は大変大きいものがある。それに加えて、今回の実習ではコロナ禍の不安を抱えて実習に臨むこととなった。コロナ禍において学生を実習園で受け入れていただくことについて、実習園側からの実習を行う上での新たな条件が追加され、実習内容についても感染予防を優先しつつ、園での子どもへの関わりを重視できるよう、本校でガイドラインを作成し、各実習園と個別に確認して進めることとなった。

筆者は、このような状況の中での幼稚園教育実習において実習後の学生の振り返りを省察することは、幼稚園教育実習指導に有用であると考えた。

2. 研究の目的

新型コロナウイルス感染拡大予防といった特殊な状況のもとで学生は幼稚園教育実習に臨んだが、実習において、実際に学生自身がどのような学びやふり返りをしているのか、不安や困難は何かなど実習後アンケート調査を実施し、そのアンケート結果から10月の第2段階幼稚園教育実習に係る事前指導の在り方について問題点や改善点を考察した。

3—1. 教育実習Ⅰの目的及び概要

本学の幼稚園実習は、前期80時間、後期80時間、計160時間の幼稚園教育実習を2回生6月に第

1段階2週間、10月に第2段階2週間行う。本学の「教育実習手引き」には、実習の目的は、①子ども理解を深め、幼稚園教諭の職務内容を理解することができる。②幼稚園教諭として必要な資質、能力、技術について実践的に理解することができる。③幼稚園教諭として必要な資質、能力、技術について実践的に理解することができる。④指導案や観察・記録の方法を理解し、作成することができる。⑤保育の実際を体験する中で、自己課題を明確にすることとある。実習において学生は、実際の保育の場に身を置き、教員の指導のもとで、子どもとの生活を共にしながら、幼稚園やこども園の役割や幼稚園教員の職務を学ぶことの意義を理解できるよう努めることである。

幼稚園教育実習の対象となっている園は、学生自身が卒園した園や学生が自己開拓した園、本学の付属園、学生の居住地から通える範囲の園を養成校で交渉してお願いしており、そのほとんどは、私立幼稚園である。教育実習第1段階と第2段階は、原則として同じ園としている。しかし、今年度は、コロナの感染拡大予防のため各市町村から6月の実習受け入れの見合わせが直前に入り、実習園27園中、10園の変更があった。そのため、事前に学生に配属を知らせた園とは異なる実習先になった学生もいる。また後期は、受け入れ可能の園もあり、後期の実習園が変更となる学生もいる。このような状況の中、学内の授業の在り方についても教員と学生、学生同士の距離も一定に保ち、かつマスクを着けたままの授業を行うなど授業の在り方も大幅に変わった。

本学における実習は、第1段階は「観察実習」と「参加実習」「部分実習」、第2段階は「観察・参加実習」「部分実習」と「責任実習」の形式で行う。「観察実習」は、クラスの活動の中に入り、園の1日の生活、年齢ごとの子どもの姿（子どもたちの遊び・生活・育ち）、保育者の姿（子どもへの関わり方、言葉がけなど）、保育内容や保育方法、保育形態、保育者の職務、環境構成、職員との連携、保護者への対応などの視点で保育現場の様子を捉えていく。「参加実習」は、観察から一歩進めて幼児と関わりをもちながら役割の一端を担い、教員の補助として活動の援助をする。また、実際に絵本や手遊び等を子どもの前で行うこともあり、実施方法は、園や各配属クラスの担当教員の考え方により異なる。実習は養成校での学びと保育現場との接点であることから、「実習で何を学びたいのか、どのような実習をしたいのか」を明確にして実習生としての心構えをもつことが大切である。また、子どもたちにとっては、たとえ実習生であっても「教員（先生）」と受け止められることから、自らの行動や言動に注意を払う必要がある。「責任実習（部分・全日）」は、園生活の1日の全てあるいは1日のある部分の保育をクラス担任に成り代わって行う実習であり、実習の最終段階として位置づけられるものである。この実習では、指導計画を作成して活動の展開を考え、保育活動を行う。学生は、責任実習において、中心となる活動に何を選択するのか、自分ができる題材（得意な分野）を考えて、題材が決まれば事前に「活動のポイント」「ねらい」を設定し指導計画を作成する。

3-2. 幼稚園教育実習の流れ

表1に筆者が担当した授業「教育実習指導」の具体的な指導内容の流れを示した。

第1段階の実習で目指すものは、幼児教育の実際に触れ、観察実習、参加実習などの機会を通じて幼児理解を深めることである。また、実習生としての自覚をもち、指導教員の実践に学び、指導教員の指導・助言のもとに活動や仕事の一部を分担していくことである。

2週間の実習を通して幼稚園教員と自己の課題に気づき、問題解決への様々な方法を学ぶこと、また、教員としての役割を認識し、幼児教育に対する意欲と責任感を高めることを目指している。

表1 「教育実習指導」の具体的な指導内容の流れ

1	幼稚園実習の指導ガイダンス・幼稚園教育実習の意義と目的
2	実習の流れの理解・個人票、書類の作成・下書き・清書
3	実習記録の必要性和記述の仕方
4	実習先オリエンテーションの意義
5	保育の実際についての理解 (見学・観察) 付属幼稚園
6	見学・観察ふり返り・記録の書き方
7	実習準備(名札・自己紹介カード作成)手遊び・絵本など教材紹介
8	6月、7月の指導計画・部分実習指導案作成
9	グループ模擬保育
10	グループ模擬保育
11	・記録簿の書き方・実習後の流れ
教育実習第1段階(6月17日～7月1日)	
12	実習情報交換会・アンケート実施
13	実習報告会に向けてグループワーク
14	実習報告会資料作成、リハーサル
15	実習報告会・第1段階まとめ
16	第2段階の意義と自己課題の明確化
17	記録簿の書き方について:「実習目標」「オリエンテーション」
18	「実習目標」、指導案の意義と書き方
19	自作教材(部分保育案の作成)アンケートによる指導案の作成(指導案作成の手順) 自作教材作成(エプロンシアター・パネルシアター)
20	責任実習に基づく各年齢の発達の特徴を捉えた指導計画の作成
21	保育指導案に基づいたグループ討議
22	事後指導の流れと記録簿提出・教育実習直前の準備と心構え
教育実習第2段階(10月17日～10月28日)	
23	実習後の振り返り・アンケート
24	自己評価票の振り返りの意義
25	実習報告会 教育実習第1,2段階を通しての学び 保育者の専門性と実践力について
26	実習報告会



図1 カードシアター



図2 歌遊び



図3 音あそび



図4 ことば遊び



図5 絵本「おべんとうバス」

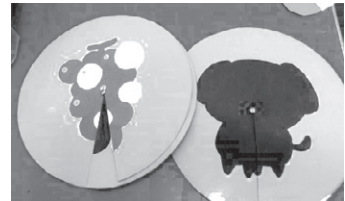


図6 シルエットクイズ



図7 色あつめ



図8 食べ物クイズ

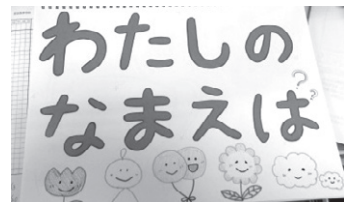


図9 名前あてクイズ



図10 絵本グループワーク



図11 手遊びグループワーク



図12 自己紹介



図13 観察保育



図14 部分保育



図15 学びの振り返

実習指導については、例年の実習授業のスケジュール通りには実施できず、5月に観察実習を2回予定していたが近隣園では行えずまた、付属園での観察実習も新型コロナウイルス感染症拡大予防の影響によって、時間を短縮せざるを得ない状況となった。また、通常であれば力を入れたいグループワークなどについても、学生の欠席も重なり「三密」を避けながらの授業を余儀なくされ、学生だけでなく教員も実習指導や実習に不安を抱きながら進めざるを得ない状況であった。このような中、実習2週間前の検温チェック、行動記録等の記入など感染対策について授業内で注意喚起を行い、一

人一人の学生が貴重な実習の機会を免許取得の第一歩として受け止め、主体的に実習に取り組めるよう指導した。

4. アンケート調査（第1段階）

対象および実施時期

令和4年度の幼稚園教育実習第1段階を終了した学生（2回生）48名を対象とし、令和4年7月実習終了後の「教育実習指導」の授業内で振り返りアンケートを行った。

5. アンケート結果

回収したアンケートをもとに項目ごとの集計を行い以下に示すこととする。

5-1. 実習の配属クラス

5歳児【27】 4歳児【24】 3歳児【28】
 2歳児【3】 1歳児【2】 0歳児【2】
 2週間のうちクラス担当交代【24】 2週間同じクラス【24】

実習1段階は各年齢の発達段階を学ぶ観察実習の観点から半数の学生が各年齢を交代で配属されている。

5-2. 実習中に指導を受けた内容・実習終了時に最も達成されなかったこと

表2 実習中に担任教諭や園長先生から指導を受けた内容【複数回答】

項 目	回答数	回答数 /48
子どもとの関わりについて	28	58%
援助・言葉かけ	20	41%
誤字脱字	4	8%
部分保育（手遊びや、歌唱指導、絵本読み聞かせ等）	37	77%
準備や片付けについて	5	10%
報告について	1	2%
環境構成	14	30%
ねらいの設定について	14	30%
その他（記録簿提出について）	3	5%

表3 実習終了時に最も達成されなかった課題【複数回答】

項 目	回答数	回答数 /48
記録簿作成に時間がかかる	16	33%
トラブル場面での指導	26	54%
全体を見ることができない	13	27%
記録簿の内容が薄い	8	16%
絵本読み聞かせ等保育技術	11	22%
手遊びのレパートリーが少ない	12	26%
言葉かけがうまくいかない	8	16%
内面を理解した援助	7	13%
発達等保育専門知識	5	10%
遊びの援助（自由遊び中の援助）	8	16%
食事・排泄等の生活習慣の指導	2	4%
記録簿の項目の意味が分からない	2	4%
保育者との関わり	8	16%

「実習中に担任教員や園長先生から指導を受けた内容」（表2）としては、多い順に「部分保育（手遊びや、歌唱指導、絵本読み聞かせ等）」が77%受けたと答えている。

「子どもの関わり方について」が58%と半数を超える学生が指導を受けたと答え、ついで「援助・言葉かけ」が41%、「環境構成」「ねらいの設定」が30%である。今回の実習では、全体の半数以上の園で部分実習が組み込まれていた。その理由としては、後期に実習園がコロナの感染拡大予防により、実習受け入れについても保証できないとのことで学生の学びを深めるために実施していたようだ。次に、保育の中で「難しいと感じたところ」を記述させたところ「子どもへの関わりについて過干渉になり過ぎない」、「子どもとの距離感のとりかた」、「子どもへの言葉かけ」などと、子どもとは積極的に関わるができるが、個別対応など子どもの発育発達を踏まえて、子どもの状況を勘案しながらとなると自信がもてないなどの記述が見られ、学生自身も担当教員から指導を受けた内容について課題であると感じていることがわかる。

また、学生が「実習終了時に最も達成されなかった課題」（表3）として、多い順に、「トラブル場面での指導」が54%、「記録簿作成に時間がかかる」が33%である「全体を見ることができない」が27%、「手遊びのレパートリーが少ない」気になる項目としては「保育者との関わり」などをあげている。園の担当教員との信頼関係を作り上げていくためには、約束を守ること、誠実さと謙虚な気持ちが必要であることが示唆されている。

「今回の実習で難しいと感じたところ」を記述させたところ、「物の取り合いの対処法、喧嘩の際の仲裁の仕方」、「気になる子どもへの関わり方、注意の仕方」などと、トラブル場面での指導の難しさをあげている。

5-3. 実習中に園で歌った歌（他の実習生や担当教員も含む）

季節の歌	ニャニユニョのてんきよほう、にじ、お化けなんてないさ、たなばたさま、時計の歌、だからあめふり、かたつむり、あめふりくまのこ、みずてっぼう、しゃぼんだま、おいけのポリカ、カエルの歌、きらきら星、おもちゃのチャチャチャ、にじのむこうに、ながぐつまーち、アイスクリームの歌、カエルの合唱、シャリシャリシャーベット、イチゴの歌、大きな古時計、お使いアリさん、ばらばらおちる、おおきなくりのきのしたで、こぎつね、まつぼっくり
遊びの歌	アチコチ体操、ミッキーマウス、ハッピーフレンズ、きょうも元気、勇気100%、ドラエモン、すうじの歌、わにのお父さん、さよならさんかくまたきてしかく、ココロの地図、てをつなごう、スーパーカリフラジリステック、エクスピアリドーシャス、せかいじゅうのこどもたちが、いぬのおまわりさん、スマイル、もりのくまさん、どんないろがすき、ラララジョイ、まんまるちゃん、こまめこまめ、えんやらものき
生活の歌	123でおはよう、たんじょうびのうた、お祈り、朝の歌、さよならの歌、仏の歌、お弁当の歌、ゆりかごのうた、はをみがきましょ、園歌、おとうばん、せんせいおはよう

5-4. 実習中に実習生が弾いた曲（他の実習生や担当教員も含む）

おかえり、おべんとう、世界中の子どもたち、にじ、カタツムリ、いぬのおまわりさん、くじらのとけい、おもちゃのチャチャチャ、むしむしじゃんけん

5-5. 実習中に子どもたちとした手遊び（他の実習生や担当教員も含む）

ならのだいぶつさん、はじまるよ、ピカチュー、大きな栗の木の下で、お弁当バス、ミッキーマウス、トントントンアンパンマン、おちたおちた、ぼうがっぽん、クイズクイズ、まあいたまご、ちいさいにわ、やまごやいっけん、りんごころころ、モモなしバナナ、パイナップル、にんじゃってなんじゃもんじゃ、てるてるまん、あくしゅでこんにちは、げんこつやまのたぬきさん、パンダうさぎコアラ、一本橋こちょこちょ、グーチョコパー、いっぴきのカエル、しあわせならてをたたこう、ぺんぎんまーくのひゃっかてん、チョコチョコキダース、キャベツの中から、いっぴきののねずみ、こぶたがみえる、おはなしおはなし、ろうそくぼ

5-6. 部分実習はありましたか

ある（37） ない（11）

- ・歌唱指導（おばけなんてないさ、にじ、かえる、かたつむり）
- ・制作（七夕飾り、カエルの制作、魚釣りの魚、カスタネット制作、風鈴づくり
アジサイ制作、てるてる坊主、袋お化け、輪投げづくり、新聞遊び）
- ・模様遊び（にじみ絵、私にワンピース）
- ・ゲーム遊び（だるまさんがころんだ、ボール遊び、新聞ボール投げ、フルーツバスケット、猛獣狩りに行こう）
- ・言葉遊び（なぞなぞ、はやくちことば、しりとり）
- ・絵本、紙芝居の読み聞かせ

5-7. 部分実習の中でうまくいかなかったところ、難しかったところ

（制作活動）

- ・出来上がりに速い、遅いや個人差があるため適切な声かけができなかった。
- ・制作時に使う道具の使い方、安全面への配慮が把握できていなかった。
- ・制作時の導入、展開、片付けなど時間配分、片付けの手順、環境構成など指示ができなかった。
- ・作ったもので遊ぶ予定であったが、終わり方が分からず十分時間がとれなかった。
- ・スムーズにできること、できないことなど子どもの把握ができていなかった。
- ・全体の活動の流れを気にしすぎて説明的になり、個々への配慮が見えなかった。

（ゲーム遊び）

- ・保育者の立つ位置や、遊びやルールについて説明が長くなり、遊びの楽しさを共有できる時間が取れなかった。
- ・子どもたちが話を聞いてくれないので、予想以上に声を出す必要があった。
- ・子どもたちの発達段階を考えた内容や導入が難しく指導案通りの展開をすることで必死になった。
- ・ゲームの終わり方が難しく担任への引き継ぎの仕方が分からなかった。
- ・参加しない子やトラブルが起こり泣いている子への関わりに気を取られ予定通りには進められなかった。

部分指導については、制作やゲーム遊びなどが主で学生によっては、自分が得意なものを生かす活動も取り入れたりしている。今回は、オリエンテーション時や実習初日に指導案を作成して持ってくるようにと指示をいただいた園が多く、そのため子どもの実態についてどんな子どもたちなの

か、どんな遊びが好きなのか分からず「幼稚園教育要領」の発達の過程やこれまでの授業で学んだことを参考にその年齢の一般的な姿から考えて指導計画を立案している。「幼稚園教育要領」第1章の指導計画作成上の基本事項と留意事項には、「幼児の興味や関心に応じてねらいを設定すること」や、「幼児の実態に即して指導計画の改善を図ること」「幼児の実態を踏まえながら工夫すること」が記述されている。このことから分かるように、幼児の実態を把握し、予測をして指導計画を立てることは重要である。実習が始まり、子どもたちと出会って、予想と違ってこんなこともできるのかと、子どもの姿から発見することや反対に目の前の子どもたちの興味や関心と合わない場合も当然ありうる。しかし、学生にとっては、事前に作成した指導案の展開でやり遂げることが目標で、子どもたちの様々な姿を予想したり、想定外の展開になった時、援助方法を工夫したり目の前の子どもの様子に合わせて再構成していくことなど状況に合わせて考えていくことが難しいことが分かる。

また、導入、展開、まとめのそれぞれの場面について子どもたちが活動を理解し、興味をもって関わるができるような環境構成のつくり方、楽しく取り組めるように手順をどう説明したらよいか、活動が始まったら、どのような雰囲気で行きたいのか、個々への対応、活動の終わりに満足感や達成感を感じる声掛けなども難しいようである。特に制作活動では、誰が何をどのように進めるかということは、実際に活動を始めてみなければわからない。保育者は一人一人の子どもと関わりながら、子どもの気持ちを汲み取って、適時に考えて援助することを繰り返していかなければならないが、実習生にとっては、自分の思うとおりに活動が流れるかどうか一番気になる場所である。「よかった、うまくできて嬉しい」「うまくいかなかった」という単純な視点の振り返りであることも伺える。保育をふり返るという点で、「活動について」なぜその活動を選んだのか、活動選択の意図、その活動は今の子どもたちにとってふさわしい活動であったのか、活動のためにどのような準備をしたのかなどの振り返りの視点が重要である。次に子どもたちの姿については、興味をもって楽しく取り組めたのか、取り組めない子どもはどのような様子だったのか、その原因は何であるかなどの視点が大切である。次に保育者の援助では全体への言葉かけ、個々への働きかけ、保育者の立つ位置、時間配分など手順や段取りも含め課題を見つけることが次回の指導の改善につながっていく。また、保育の中で大切なことは、子どもたちを保育者の意図した方向に引っ張っていくのではなく、クラスの子どもたちを主体にして考えていくなど振り返るポイントがたくさんある。「できたこと」「できなかったこと」という単純な視点ばかりでなく、「ここが難しかった」「どのやり方を選択したらよかったのか」など自分の課題を確認していくことが大切である。

また最近、実習園では幼稚園が「認定こども園」に移行してきている。そのため満2歳児からの保育を行っている園も増えてきているので、1歳児から5歳児の幼児の発達段階の理解も再度確認の必要がある。

アンケートの最後に「これからの自分の課題」を記述させたものを筆者が、内容によって表4のように分類した。表2や表3の結果と同様「子ども理解」や「記録簿」に関する記述が見られた。

表4 これからの自分の課題

分 類	記 述
子どもへの関わり	積極的に子どもと関わり、子ども理解を深める 一人一人と全体への子どもへの関わり方 子ども同士のトラブルの対応の仕方
記録簿	誤字脱字をなくし、内容が伝わる文章表現を意識する 保育を振り返る視点をもち、内容を深める
保育者理解	コミュニケーションをしっかりとる 担当教員の環境構成や援助の意図を学ぶ
指導案	予想される子どもの姿に応じた指導案、発達を考えた指導案の組み立て
教材研究	手遊び、絵本、活動などの教材研究 子ども実際の姿と保育者の援助の書き方、指導計画の大切さ ピアノの練習、子どもの様子を見ながらピアノが弾けること 環境のつくり方や教材選択

6. 実習の課題からの分析

実習園の担当指導者や園長先生からも、指導助言をいただき、改善をするという流れで実習を深めていると思われるが、なぜそうした方がいいのか考える間もなく言われるままに改善したこともあったかもしれない。実習中の毎日は、記録簿、指導計画、教材の準備、環境整備、環境構成など忙しく、一つひとつの疑問をその場その場で解消することはなかなか難しいこともあるが、日々自己評価を重ね、まずは自分のできなかったことに対して、担当指導者はどのように指導をしているのかよく観察をしていくことも大切である。

まとめと課題

子どもたちから「先生」と呼ばれ、子どもたちの前に立ち、苦勞しながら肌で感じた実習であったが、学生たちにとってこの1段階の実習は2段階につながる大きな学びであったことが伺える。

保育の計画は実際の活動が保育者の予想を超えて展開することもありうる。このような場合、計画した通りに行かせようとするのではなく、子どもの主体性を大切に、子どもの発想や偶然性などを生かし臨機応変に対応することが必要となってくる。子どもたちの実際の姿と照らし合わせたうえで、計画におけるねらいや内容の設定が適切であったのか、ねらいを達成できるような適切な援助であったのか、次の計画を立案するときにはこうした反省点を生かし、改善を行っていくなど、指導計画を立案する際の重要な視点である。

学生のアンケートから見えてきた課題に対して、実習の前にどんな力をつけるのか限られた授業時間では難しい内容であるが、実習に必要な指導計画の立て方、記録の視点、保育の活動内容、保育の進め方など模擬保育を通して今後もさらに進めていく必要がある。また、実習前に、学生自身が意欲をもって取り組めるよう、様々な角度からヒントを与え、教材研究する環境を整えていきたい。

第2段階の実習に向けて、一人一人の学生が貴重な実習の機会を幼稚園教諭免許資格取得の第一

歩として受け止め、主体的に実習に取り組み、さらに幼稚園教諭としての資質向上心をもつように授業の展開を考えていきたい。実習前に保育力をつけることは大事であるが、やり方や保育方法をマニュアル化してしまうことを危惧する。

授業では学生に伝わりにくい部分であるが、十分な準備をして実習に臨むことで、保育の本質を捉える学びに近づいていけるものと考えている。実習前にどのように保育力をつけるか、それはすべての教科が連動し、学生に意識付けるとともに子どもの成長発達とどう関わるのかという原点に学びの軸足を置く指導が学生の学びの質を高めることにつながると考える。

今回の実習の結果を無駄にすることなく、さらに先につなげるためにも実践的な指導を取り入れつつ、保育養成につなげる授業のあり方を考えていきたい。

実習にあたり学生健康観察の記録、行動記録の実施、コロナへの感染を心配しつつ実習に行かせること、また実習園では子どもたちへの安全確保に加えて学生の感染予防への対応などしていただき、第1段階の実習を終えたことは学生にとっても大きな学びとなった。実習後の報告会においても学生の成長した姿を見ることが出来た。

今後、コロナの収束も見えない状況で実習を行うにあたって、実習園との事前の情報交換、実習訪問の際、養成校としての授業の状況、学生の実態など情報交換の場をつくるなど、養成校と実習園とが協働していくことが保育者養成をしていくためには必要であると考えます。

注1) ここでいう、幼稚園現場実習の実習先は、「幼稚園、幼保連携型認定こども園、幼稚園 型認定こども園」である

引用・参考文献

文部科学省 (2018)「幼稚園教育要領解説 (平成30年2月)」(https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf 2021.9.7)

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領』平成29年告示
- 2) 実践につながる新しい教育・保育実習 ミネルヴァ書房2022、3月p.22～p.30
- 3) 教育実習・学校体験活動 ミネルヴァ書房11月p.76～p.92